

市立病院 応援隊

知っていますか？

3

市民の手で地域医療を支える ～市立病院応援隊～

市立病院の経営が厳しさを増すさなか、市民の命と健康を守る市立病院を自分たちの手でも守っていかうという想いのもとで、2012年に設立された団体が「市立病院応援隊」です。

今回は、さまざまな面で長年病院を支えていただいている、応援隊の鈴木勉代表からお話をうかがいました。



■応援隊の始まりと意義

2012年当時、現在とは違う状況ながらも市立病院は赤字に苦しんでいました。そのようななかで、市民にできることはないかと当時の土別商工会議所会頭、千葉道夫さんが発起人となり、応援隊が設立されました。

私も設立当初から参加し、はじめは約70人の市民有志が集まりました。応援隊の活動で、当時病院が抱えていた赤字を解消できるとは考えていませんでしたが、病院とそこで働くスタッフを支え、負担を軽くすることはできるとの思いから、環境整備をはじめとした市立病院に必要なことを市民目線で取り組んできました。

市立病院は、私たち市民の命と健康を守る地域医療の中核として、なくすわけにはいかない場所です。しかし、病院が抱える医師不足や運営、経営などの問題を、病院だけで解決するのは困難です。

だからこそ、病院の問題を市民もしっかり認識し、考えることが重要です。そのうえで市民にできることをやっていこうという思いが、応援隊の意義です。



▲応援隊が毎年実施している環境整備。駐車場や入口周辺の花壇に花を植えている。

■現状から病院の今後を考える

日本国民として、どの地域に生まれても高度医療を受ける権利はあります。しかし、現状は医師の偏在が大きな問題となっており、人の多い都市部が優先され、地方は後回しになっています。

医師数が少ない場所では、優秀な医師を育てることも困難になります。自治体側も、医師の定着に向けさまざまな取り組みを行っていますが、自治体だけでは限界があ

るため、国に働きかけていく必要もあります。

現在の市立病院は、慢性期・回復期中心の医療に移行していますが、これは経営改善の側面がある一方で、ほかの部門の専門性が病院から減少する一面もあります。

病院の運営に正解はありません。しかし、先が見えなくても、この病院を未来まで残すには、経営の改善や柱とする医療の方向性ももちろん大切ですが、人口減少がすすんだ20年後、30年後にどうあるべきか、といった長期ビジョンに立った議論も重要です。

そしてそれには、利用者の目線で英断をくだせる病院のリーダーと、公立病院として最終的に責任を持つ首長の存在が肝だと思っています。



▲新たな医師が市立病院に赴任した際は、応援隊が激励の気持ちを込めて歓迎式を行い、あたたかく迎え入れている。

■応援隊のこれから

応援隊も、活動に変革が必要になっている時期が来ていると考えています。これまでのように、いわば病院の側面からのサポートだけでいいのか、という思いがあります。

市民からの意見や提案の吸い上げと合わせて、病院スタッフと病院の行く末について語り合う機会をつくりたいと思っています。応援隊の会員数も減少しつつあるいま、新しい風が必要になっています。

病院利用者である市民のみなさんには、現在の市立病院に対し、要望を言うだけでなく「自分は何ができるだろう」と考えてほしいと思っています。未来のまちに病院を残すために、応援隊として一緒に活動してみませんか。